

<朝刊>文化 田中 函 函 <夕刊>文化・芸能 田中 函 函 / 土曜カルチャー 田中 / 科学 田中

被爆作家 原民喜研究のいま

<上>

広島での被爆体験を書いた小説「夏の花」などで知られる作家・詩人の原民喜(1905-51年)の書籍と、仲間と作った同人雑誌が札幌の連立図書館で見つかったことは、原民喜研究を長年続けてきた人たちに驚きを与えた。同図書館は民喜が編集に携わっていた雑誌「三田文字」(東京)や広島市の遺族、関係団体と協力して、資料の活用方法を模索していき考え、原民喜研究の現在を紹介する。(中村公美が担当)、「1」は15日回の朝刊文化面に掲載します。

長光太資料の意義

99年、本名・末田信夫の遺族が003年に同文学館を運営する公益財団法人北海道空館に寄贈した大量の資料に含まれていた。

長は大阪府生まれ、広島市育ち。早大文科中退。民喜とは学生時代から生涯にわたり交流し、学生時代から同人誌をもとに発行した文学仲間にも、民喜の詩「海の小品」が札幌の「北方詩会」発行の同人誌「野性」に掲載されたこともある。

民喜没後の長は書簡は、以前から広島市田中図書館の文学資料室に保管されていた。東京から札幌に移り住んだ長が書きしる紙やはがきは151通。94年に民喜の親族が同館に寄贈した資料に含まれていた。一方、長に宛てた民喜書簡は「定本 原民喜全集(78-79年刊 青社)」に

創作支え続けた理解者に光

収録されているものの現物は行方不明で、広島の研究者が長年探していた。同図書館の田中浩子学芸員は「今まで民喜の書籍の現物が見つかったことがない。長が長年探していた。今、長が書簡を寄せてくれた。今回の発見は、状況が変わるのでは」と期待を寄せ、同館は長が書簡をデジタル化して保存しており、研究に活用してもらいたい考えだ。

2人の書簡は本が戦後、民喜が札幌に暮らしていた時に書かれ、民喜の最晩年まで続いた。民喜の生活や創作を精神的に支えたことがうかがえる。戦後、広島で困窮生活を送っていた民喜は46年11月に東京へ来て同居し、「長に宛てて早く来い」と長に促され、4月に上京する。長は47年に札幌に移るが、やりとりはさらに密になる。

民喜「僕の詩は自分であり高く評価していないし、今後詩でどんな仕事をするかもあまり抱負しない」というのは、(8月16日)長「君の詩を高く評価したい」と話している。

札幌で民喜資料の整理・研究に当たる北海道文学館の平原 良副理事長は「長と民喜の交友の証となる貴重な資料なので、広く活用されるように、北海道から発信したい」と話している。

広島で民喜作品の研究を続ける「夏の花」を歩く会(の竹原陽子さんは「民喜文学は一貫して人間の根源的な問題を突きつけ、それが現在でも多くの人の心を打つ。一番の理解者で、才能を言っていて創作活動を支えたのが、2人の書簡からは強い絆や、文学への熱い思いが伝わってくる」と話す。今後は本格的に長が書簡や作品研究を進め、足跡に光を照らしたいと言っている。



長光太が民喜に宛てた書簡。民喜の詩のすばらしさをたたえ、詩集を出すように勧めている(広島市立中央図書館蔵)



④原民喜 ⑤広島市立中央図書館提供 ⑥連立図書館を訪れた長光太 ⑦1907年2月半頃(長さん撮影)

今回、北海道で民喜の書簡や回覧雑誌がまとめて見つかったと聞いて、大変驚きました。長光太さんに宛てた民喜の手紙は、全集に掲載されているのに現物はどこにもあるか分かりません。広島の研究者が長年にわたって捜し続けていたのだったからです。

長さんと民喜は学校は通ったのですが、広島市の街偶然出会い、2人とも文学少年だったことから意気投合。民喜が45歳で自死するまで、ずっと交わりあう友情を保ち続けていたと聞きます。今回の民喜の書簡、その宛の書簡からは、2人の強い絆と、文学的にも影響を与えていた関係がうかがえます。

民喜のおい 原時彦さん

原時彦(1903-74)は、民喜から創作権を継承するよう指名された。「夏の花」の舞台を巡るフィールドワークなど、民喜文学を伝える活動を続けてきた。

原時彦は「夏の花」の舞台を巡るフィールドワークなど、民喜文学を伝える活動を続けてきた。



苦悩や情熱 筆跡ににじむ

化を受けて東京から広島に疎開してきました。わが家にはいつもメザシをお土産持ってきてくれた。食糧事情の悪さを考えての優しさでした。広島が被爆した後、東京に再び戻ったのは突然自死です。彼は子供がなかったため、遺言で私が作品著作権を管理するようにになりました。その責任に感じながら生きてきました。

「夏の花」など民喜の作品は教科書に掲載され、困因ですと読み継がれています。さらに現在は英語、スペイン語、中国語、ロシア語などで愛読されています。民喜の平和への思いが世や国境を超えて伝わっているに願っています。今回、北海道で書簡が見つかったのは、長さんが縁をもたらしくれたように感じます。北海道の人が民喜作品を読むきっかけになればありがたいです(談)